いわゆる「構造改革論」の理論的性格

山本二三丸

まえおき
一　「構造改革論」者による説明
　1　「構造改革」の意味
　2　「構造改革」の具体的内容
　3　「構造改革」の条件
二　「構造改革論」の理論的性格
三　要約

まえおき

「資本主義は変った」という、ひびきのよいキャッチ・フレーズをただひとつの拠りどころとしてつくりあげられたいわゆる「現代資本主義論」なるものが、理論的にみてどのような性格のものであるかということは、さきに簡単な検討を加えておいたところであるが、[1] この種の「現代資本主義論」はいまなおいろいろの形で再生産されており、しか

も、この「現代資本主義論」とかたく結びついてむしろこれを唯一の「論拠」としているいわゆる「構造改革論」なるものも、たんに理論の分野においてのみならず、実践の分野においても意識的にその普及化がはかられているようである。そこで、本稿においては、「現代資本主義論」といわば表裏一体を成しているこの「構造改革論」をとりあげて、それの理論的性格を吟味し、あわせてそれが実践の分野ではたす客観的な役割、いいかえればその階級的本質を究明することをこころみることにしたいと思う。このようにいわゆる「構造改革論」の客観的、実践的役割を究明することは、今日の日本における民主主義運動の発展にとって決定的な意義をもつものと確信することができるが、同時にそれの客観的、実践的役割を究明することによって科学的理論の真の意義をよりいっそう明確にすることにもなると考えられるのである。

（1）　拙論、「『現代資本主義論』の性格について」、『経済評論』一九五八年十一月号所載（拙著『現代資本主義の経済法則』一九六二年刊、所収）。

ここにいわゆる「構造改革論」というのは、今日日本の一部の「マルクス主義者」といわれる人々によって説かれ、宣伝されているものであって、本稿によって直接とりあげられている議論は、石堂清倫、佐藤昇両氏編にかかる小冊子『構造改革とはどういうものか』（一九六一年、青木書店刊）の中に展開されているものである。この小冊子を当面の考察の対象としてえらんだのは、それがいわゆる「構造改革論」者のめぼしい代表的論者をあつめてできあがっている「衆智の産物」[2]であるということと、その「まえがき」にも明記されてあるように、それが「構造改革の基本的な考え方を、できるだけわかりやすく説明することを目的としている」（同書、四ページ）ということによるものである。さきに拙論「『現代資本主義論』の性格について」の中で同じ「構造改革論」者の一人、井汲卓一氏の論文「過

渡期としての現代資本主義」を検討したさい痛感されたことであるが、「わかりやすい説明」でない場合には、当の論者自身わけのわからない言葉の綴り合せで自他共にくらますという珍現象――といっても、わが国では、この手が実によく用いられ、むしろ常套手段ともなっていることであるのだが、――によって、読者が無用の迷惑をうけることが多く、したがって、「わかりやすい説明」の場合には、その理論的内容、その本質をごまかされることなくとらえることが可能となるであろうというのが、その理由である。

（2）この小冊子の著者である「私たち」（前出、三―五ページ）とは、佐藤昇、大橋周治、浜川浩、石渡貞雄、杉田正夫石、堂清倫の六氏である。これにさきの井汲卓一および今井則義の両氏を加えれば、日本のいわゆるマルクス主義的「構造改革論」者のめぼしいところは顔を揃えたことになろう。

右の小冊子の内容全体にとって基調となっているのは、その第一章「構造改革とは何か」（佐藤昇氏執筆）であるので、われわれもこの第一章に重点をおいて検討してみることにしよう。ただし、「わかりやすい説明」と明示されてはあるものの、それはたんに字面（ジラ）の上での、形式にかんすることであって、その簡単で平易に見える字面がふくんでいる論理的、理論的内容はけっして「わかりやすい」ものではない。字面が「わかりやすい」ためにそのかくされた内容の正否をただしく読みとることはかえって困難にされているともいうことができるものである。そこで、われわれとしては、このいわゆる「構造改革論」なるものの理論上ならびに実践上における決定的に重大な意義にかんがみて、右の小冊子の第一章の中の重要な部分について、それを構成している各文章をひとつひとつ丹念に吟味していくことが絶対に必要であると思われる。全体としての大意を汲みとって議論をすることは、当事者相互に相手方の議論を正確にとらえることを省略することになり、結局、より長い時間と手間とを必要とする上に、要領をえない水掛

論に終ることになってしまうからである。

考察の順序は、右の第一章「構造改革とは何か」の中で展開されている説明の順序にそのまましたがうことにしたが、しかし、必要に応じて他の章の中から関係箇所を引用してあわせてその理論的内容をよりいっそう正確にとらえるという手数をもとることにしたものである。

一　「構造改革論」者による説明

1　「構造改革」の意味

(一)

第一章「構造改革とは何か」の第一節「構造改革と改良および革命」のはじめにおいて、まず、「構造改革」という言葉の簡単な意味が示されている。

「……ふつうに構造改革という場合、この構造という言葉は、広い意味では、独占資本主義の政治経済構造をさしている。ゆえに構造改革とは、資本主義の政治経済構造を民主主義的に改革する闘争であり、民主主義革新ないし民主的改造の闘争ともいわれている。しかし、ここでは便宜上、構造改革を独占資本主義社会の下部構造、経済関係の部面における改革、いいかえれば経済面における民主主義革新の闘争としてとらえ、政治面をもふくむ民主主義革新の闘争、すなわち広い意味での構造改革については別に述べることにしたい」（石堂清倫・佐藤昇編『構造改革とはどういうものか』、一一―一二ページ）。

ごらんのように、一見すると、これらの六名の「理論家」が自負しているように、「きわめてわかりやすい説明」のようにみえる。だが、すこし注意してみると、なかなか、「きわめてわかりやすい」どころか、「きわめてわかりにくい」すじの通らない説明であることがわかってくる。

まず、「政治経済構造」という言葉である。この言葉はどういう「構造」を指していったものであろうか？「構造」という普通名詞は、ひとつの「組み立て」を意味するもので、いろいろの構成部分から成り立つひとつの全体を――しかも、それらの諸構成部分がその全体を組立てる関係のもとにそういう一定の種々ことなった規定をもったものである諸要素であるときにはじめて――あらわす。たとえば、家はひとつの構造であり、その屋根、柱、床、基礎、等は、その構造を構成する不可欠の要素である。もし、基礎だけならば、それでは構造にならぬ。ところで「独占資本主義」とはなにか？　いうまでもなく「独占資本の支配する社会」であり、簡単にいえば「独占資本主義社会」である。では、「社会」の「構造」とは、なにか？

ここでわれわれに想起されるのは、マルクスがその著書『経済学批判』の「序言」(Vorwort) の中で述べている「社会の経済的構造」(ökonomische Struktur der Gesellschaft) という言葉である。

「人類は、かれらの生活の社会的生産において、一定の・必然的な・かれらの意志から独立した・諸関係を、かれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に照応する生産諸関係をとりむすぶ。これらの生産諸関係の総体は社会の経済的構造を、すなわち、そのうえにひとつの法律的および政治的な上層建築がそびえたち・そしてそれに一定の社会的な意識諸形態が照応するところの・現実的土台を成す「(ディーツ版、一五ページ、傍点―山本)。

この説明によって明示されているのは、第一に、「社会」の「経済的構造」とは「生産諸関係の総体」によって成り

立っているものだということである。そして、第二には、右の「生産諸関係の総体」である「経済的構造」を「現実的土台」(reale Basis) としてその上にはじめて「ひとつの法律的および政治的な上層建築」(ein juristischer und politischer Überbau) がそびえたつ (erhebt) ものだ、ということである。

ところで、「独占資本主義社会」の「政治経済構造」というのは、その社会の「経済的構造」と「政治的構造」とをいっしょにあわせて、「政治的構造および経済的構造」というかわりに、つづめて「政治経済構造」といったものであろうか？　それとも、ひとつの家で屋根、柱と基礎とが対応しているように、「政治」と「経済」とではじめてひとつの「構造」をかたちづくるものとみて、「政治および経済から成る構造」というのをつづめて「政治経済構造」と云ったものであろうか？

「独占資本主義社会の下部構造、経済関係の部面における改革」という、右につづく佐藤氏自身の文章から推せば、「政治と経済とから成りたつ構造」でないことは、あきらかなようである。とすれば、「政治的構造および経済的構造」ということにならざるをえないが、さてそこで、当然問題となるのは、いったい、「社会」の「政治的構造」というような「構造」があるだろうか？　ということである。「構造」一般ということであるならば、いろいろな「政治的組織」の「組み立て」ということで、「政治的構造」という言葉も、言葉そのものだけとしては成り立ちえよう。しかし、そのばあいでも、そのいろいろな「政治的組織」がいろいろの質の異なったものであり、これらの質の異なった構成要素の「組み立て」から成る「政治的構造」というようなものが、はたして、考えられるであろうか？　政治体制はひとつの社会を全体として貫ぬき支配する組織であって、そこに異質のものがあったのでは、そもそも政治体制あるいは政治組織なるものは、成りたたない。「政治的組織」というものが、はじめから異質の各異なった要素から成

り立つ「構造」であることと相容れないのである。そして、それだからこそ、「経済的構造」を「土台」としてその上にそびえたつものを「政治的上層建築」とマルクスは規定したものである。いうまでもなく、「法律的および政治的な上層建築」というのは、右の「政治的構造」において支配的な生産関係の担い手たる支配階級によっての、その支配する「経済的構造」＝「土台」の維持および強化のための、強制の体系であり、強力的支配の組織にほかならないからである。

それゆえ、「独占資本主義の政治経済構造」というのは、さきのマルクスによる有名な「定式化」の内容をすこしもわきまえないところの――つまり、マルクス主義のイロハを知らない――まったく誤った言葉だといわなければならない。同様に「独占資本主義社会の下部構造」というのも、誤りである。両者ともに「独占資本主義社会の経済構造」と訂正されなければならない。

このように「政治経済構造」という言葉がきわめてアイマイな、混乱した考え方を示す誤った言葉だということは、つぎの点を考慮に入れるとき、さらにいっそう明白なものとなる。

それは、佐藤氏が「構造改革」をば「下部構造＝経済面における民主主義革新」と「政治面をもふくむ民主主義革新」とに分けている点である。「下部構造における改革」とは、いうまでもなく「生産諸関係の総体」すなわち「生産諸関係の組み立て」を改革することである。ところで「生産諸関係の組み立て」を改革することは、「経済関係の部面における闘争」をもって、つまり「政治の部面における闘争」を除いて、はたして成しうるであろうか？　そもそも、「生産諸関係の組み立て」を改革すること自体、「経済的闘争」であって「政治的闘争」でない、などといえるであろうか？　「生産諸関係の組み立て」を改革することは、そのこと自体、すでに「経済的闘争」ではなくして、「政治的

闘争」であり、「政治的闘争」を通じてのみ実現され、したがってまた当然に「政治的上層建築」の変革を伴わざるをえない。「経済面における民主主義革新の闘争」というのは、わが「構造改革論」者たちにしたがえば、――のちに詳細に究明されるが、――たとえば、「最賃制」とか「完全雇用」とか「独占の制限」とかいうことである。ところで、これらのものは、ひとつとして「生産諸関係の組み立て」を改革するものではない。「現存の生産諸関係」、「現存の支配的な生産諸関係およびその他の生産諸関係とから成る現存の組み立て」を前提し、それを保存し維持するものでしかない。たとえば「資本制的私的所有」という生産関係を変革することは、なるほど生産関係の変革という意味では「経済面における変革」といえないことはないが、それは「社会の構造」、「経済の構造」全体の変革であって、たんなる「社会の一面」の変革などではありえない。しかもこの「社会の経済的構造」の変革は「政治面における闘争」を通じてのみ、それを媒介としてのみ、おこなわれうる。

ごらんのように、「わが構造改革論」者たちが、「政治経済構造」の「構造改革」だと称しているのは、実は、「経済的社会構造」を「政治面での闘争」を通じて「改革」するということの、混乱した一表現にほかならないことがわかるのである。「政治経済構造を民主主義的に改革する」というのは、「政治」も「経済」もみな包括してまことに壮大かつ結構なもののように聞えるが、ひと皮はげば、「経済的構造」＝「現実的土台」と「政治的上層建築」との関係を誤解し、「政治的闘争」という「手段」を「政治的変革」という「目的」と混同した・救いようのない内容空虚な・大言壮語でしかないという正体がばれるのである。

ところで、「民主主義的に改革する」とは、いったい、どういうことであろうか？　この言葉も、当世向きでまことに景気のよい、ひびきのよい言葉である。だが、さきにあげた『経済学批判』の「序言」からの引用箇所につづく部

分においても明らかに定式化されているように、「経済的社会構造」すなわち「生産諸関係の総体」の変革は、ただ、法則的にのみおこなわれうる。ひとはやたらに自分勝手な目的をたててそれにむかって「経済的社会構造」を変革するというわけにはいかない。そこで、当然に問題となるのは、わが「構造改革論」者たちが「経済構造を民主主義的に改革する」といっていることの客観的意味である。いったい、その「民主主義的改革」というのは、どういう法則にしたがっておこなわれるものであるか、そしてまた、その改革によってそこに生まれるのはどういう「経済的社会構造」であって、それは従来の「経済的社会構造」とどういう点において本質的に区別されるのか？　ということである。このことは、行論においてあらためてとりあげることとし、そのまえにまず、「構造改革」という言葉の内容についてのすすんだ説明をきくことにしよう。

(二)

さきに引用した箇所にひきつづいて、佐藤氏は、「改良闘争」と「構造改革」とを対比させて、「構造改革」がどんなに「改良闘争」とちがったものであるかを説明している。

まず、「改良闘争」について。

「構造改革は構造的改良（構造の改良）ともいわれているが、ふつう改良闘争といえば革命闘争に対比してつかわれており、労働者の労働条件や生活条件を改善すること、すなわち、労働者や勤労者の労働条件や生活条件を資本主義の枠内で可能なかぎりよくする、あるいはその悪化を防ぐ闘争を意味している。この種の改良のための闘争はいうまでもなく今日でも必要であり、現にたたかわれている」（前出、一二ページ）。

ごらんのように、「改良闘争」は、「労働者や勤労者の労働条件や生活条件」を「資本主義の枠内で可能なかぎりよくする闘争」あるいは「その悪化を防ぐ闘争」である、と述べられている。ところで、右の引用箇所の最初におかれている「構造的改良（構造の改良）」とは、どういうことを意味する言葉であろうか？　さきにあげた例で、たとえば、ひとつの家を「構造」としよう。つまり、独占資本主義社会をまさに独占資本主義ならしめる当の「経済的社会構造」を「家」にたとえてみるならば・そこでのもっとも基本的・中心的な生産関係、まさに独占的な資本制的私的所有でなければならない。これは、「家」についていうならば、大黒柱とも四方柱ともいうことができる。その他の主要な生産関係、すなわち資本制的私的所有は、「その他の柱全部」に、さらに私的所有一般は「基礎」にたとえることができるし、また、それらはそういうものとして「家」を構成するものとなっていなければならない。ところで、「構造的改良」というのは、右のような「家」の「構造」をどのように変えるというのであろうか？　その中の「柱」の一本が古くなったから、その一本の「柱」を新しいのに変えようというのであろうか？　それならば、「構造」そのものはなんら変化をうけることはない。ただ「柱」の一本が変るだけである。つまり、「構造」の「改良」などではけっしてなく、「柱」の「改良」でしかない。「構造」そのものにはすこしも変化がなく、依然として、大黒柱とその他の支柱と基礎およびその他の・右の三者によって規定的影響をうける・諸部分とから成り立つ「家」＝「構造」のままであるならば、たとえ「柱」をいじってみたり、大黒柱を少々削ってみたところで、「家」＝「構造」はびくともせず、まったく元のままの「家」であり、同じ「構造」であることは、誰の目にもあきらかである。「構造」が「構造」として「改良」され、変化するためには、「構造」そのものが、つまり、これを構成している「生産諸関係」が、なによりもまずその基本的・支配的生産関係が、変革されなければならない。「構造」そのものが変るということは、その

「構造」を組み立てている諸要素が根本的に変ることである。この点からみれば、「構造的改良（構造の改良）」という言葉は、わが「構造改革論」者たちの概念規定なるものが、たんなる普通名詞についてすら、きわめてアイマイかつルーズであることをうたがう余地なく示しているものといわなければならない。行論において詳細に検討されるはずであるが、これらの論者は、一部の「柱」を削ってみたり、「基礎」に防腐剤を塗ってみたり、あるいは窓枠をとりかえたりしさえすれば、それで「家」という「構造」そのものが改良されたと思いこんでいるのである。これらの部分的「改良」は、それぞれの部分の「改良」であって、これを「家」＝「構造」全体の「改良」だなどと主張することは、客観的にみれば、まったくのペテンといわなければならない。

では、右のようないわくつきの「構造的改良」とは、いったい、どういうものか？

「ここでいう構造改革ないし改良とはこのような労働条件、生活条件の改善が基礎とはなっているが、そこにとどまるのではなく、さらに一歩をすすめて、そうした労働条件や生活条件に影響をおよぼしてくる独占ブルジョアジーの経済政策、あるいはその基礎にある独占資本主義の生産関係に眼をむけ、その政策を転換させ、その経済構造（生産関係）を部分的に変革してゆくことである。その意味で構造改革は従来、労働運動でいわれていた改良とは異なっており、独占支配の結果――労働条件や生活条件の悪化に対する防衛的なたたかいから一歩をふみだし、その原因に対するたたかいにとりくもうとするもので、ふつうの改良闘争――経済闘争ないし要求獲得闘争にくらべてはるかに攻撃的・先制的な性格をもっている。しかしながら、他方、構造改革は革命の勝利後におこなわれる資本主義的生産関係の根本的な変革とも異なっている。革命後における根本的変革とはいうまでもなく、国家権力を掌握した労働者階級が資本主義的私有制を一掃して、新しい社会主義的な生産関係によってそれをおきかえることであるが、構造改

革は革命後の根本的変革そのものではなく、そのような根本的変革に近づいてゆく過程で、より正確にはそうした変革に途をひらくために独占ブルジョアジーを追いつめてゆくたたかいであり、その意味ではやはり改良であって、革命とは区別されなければならない」（前出、一二―一三ページ）。

ごらんのように、ここには、「攻撃的・先制的」とか、「独占ブルジョアジーを追いつめてゆくたたかい」とか、まことにめざましい、西部活劇もどきの表現がつかわれているが、はたして、その実質においても、真に「攻撃的・先制的」なものであるかどうか、――俗に「口ほどにもないから威ばり」という諺もあるくらいである、――念をいれて検討してみることにしよう。

まず、はじめに当然に吟味されなければならないのは、**「そうした労働条件や生活条件に影響をおよぼしてくる独占ブルジョアジーの経済政策、あるいはその基礎にある独占資本主義の生産関係に眼をむけ、その政策を転換させ、その経済構造（生産関係）を部分的に変化してゆくことである」**というくだりである。ここにふくまれている主張をひとつづつとりだしてみてみよう。

① 「労働条件や生活条件に影響をおよぼしてくる独占ブルジョアジーの経済政策、あるいはその基礎にある独占資本主義の生産関係に眼をむける。」――まず「労働条件や生活条件に影響をおよぼしてくる」というのは、もちろん「良い影響」ではなくして「悪い影響」でなければならないと思われるが、[3] ここでもっぱら「影響」だけがとりあげられているところに注意されたい。いったい、「労働者の労働条件や生活条件」についてわれわれが考えるべきことは、それらの「条件に影響をおよぼすもの」だけであって、それらの「条件を決定するもの」は問題にならないであろうか？　独占資本主義社会をもふくめておよそすべての資本主義社会において、労働者は労働力以外に売るべき何物を

も所有しない無産の賃銀労働者の立場におかれており、したがって当然にその労働力を資本家に売り渡さざるをえず、その労働力の消費はもっぱら資本の価値増殖のためにもつぱら資本家の指揮監督のもとにおこなわれ、その労働力＝商品の販売価格すなわち賃銀はできるかぎり買いたたかれ、したがってその生活条件は必然的に劣悪なものとならざるをえない。要するに、「労働者の労働条件や生活条件」は資本制的生産関係によって法則的に規定され、決定されているのであって、きわめて狭い、限られた範囲内でしか動きえないものである。このように資本制的生産関係そのものによつて規定された「労働条件および生活条件」の「悪化」という法則をあきらかにしたものこそが、科学的経済理論であること――このことは、いまさらいうまでもないことである。たとえば、「労働条件」がもっぱら「価値増殖」本位であって労働者本位でないのは、いいかえれば、「労働条件が劣悪である」のは、私的所有という基本的生産関係の上に発展した「所有者＝非労働力、労働力＝非所有者」という資本制的生産関係そのものによって直接に規定されているのであって、「ブルジョアジーの経済政策」などによってこの生産関係による直接的規定が、したがって「労働条件の劣悪」が、「影響をおよぼされる」などということは、まったくありえないのである。まさにその逆であって、「ブルジョアジーの経済政策」なるものは、右の資本制的生産関係によつて直接に規定された・一定の限られた範囲内でのみ運動しうる・「劣悪な労働条件および生活条件」を実現するための方策にほかならない。「ブルジョアジーの経済政策」という言葉そのものは、その「政策」が「ブルジョアジーの自発的意志」にもとづき、「ブルジョアジー」自身の維持＝存続にとって自ら必要と考えているものだということを示している。「ブルジョアジーの自発的意志」および「ブルジョアジー自身の維持＝存続にとって自ら必要と考えているもの」は、すべて資本制的生産関係によって直接に規定されたものであって、それ以外にありえない。たとえば、労働者の階級闘争の圧力にお

されて賃銀の若干の引上げ――実は買いたたきの一部手加減にほかならないもの――をおこなったとしよう。このばあい、「賃銀の若干の引上げ」を「ブルジョアジーの経済政策」であるなどというのは、国語的にみてもはなはだしい誤りである。このばあいは、「賃銀の若干の引上げ」をいやいや認めざるをえなかったのであって、けっしてかれらの「自発的意志」「欲するところ」などではない。むしろ、「賃銀の若干の引上げ」を認めたこと自体が――客観的にみれば――一種の高等政策ともいうべきものである。というのは、この「若干の譲歩」によって労働者の階級闘争の方向をそらしたり、これを鈍化させたりすることができれば、階級支配にとってきわめて有利であるからである。だが、これは、文字どおり政治的な政策であって、経済政策などではないことは、いうまでもない。それゆえ、佐藤氏がここで「労働条件や生活条件」を「決定するもの」ではなく、もっぱらそれに「影響をおよぼす」ものに注意をむけ、しかも、この「影響をおよぼすもの」をもって「独占ブルジョアジーの経済政策」だなどと論じているのは、氏自身が資本主義社会の基本的経済法則についてほとんどまったく理解していないばかりでなく、そもそも「政策」とはどういうものかという、その一般的意義をすらまったくわきまえていないことを、このうえもなくあきらかに示しているものといわなければならない。

(3) 佐藤氏が「ここで労働条件や生活条件に影響をおよぼしてくる」といって、それらの条件を「悪化させる」とか「悪い影響をおよぼす」というように明記していないのは、おそらくは、「良い影響をおよぼす」ことも可能と考え、しかも「良い影響をおよぼす」ように闘争を持っていかなければならないという主張がすぐつぎにひかえているからだと思われる。つまり、独占ブルジョアジーは、「構造改革闘争」が筋書きどおり進むと、「その政策を転換し」みずから「良い影響をおよぼす経済政策をとる」ようになるはずだ、という次第なのである。

ところで、佐藤氏はここで「独占ブルジョアジーの経済政策、あるいはその基礎にある独占資本主義の生産関係」というように、「経済政策」と「生産関係」とを「あるいは」という単語で附けて並べている。「あるいは」（oder）という言葉の意味は、「同じ内容のことを別の表現をつかえば」、「同じ事柄を視角をかえてみれば」という意味につかわれるばあいと、「晴れあるいは曇り」というようにまったく別々のことを、つまり「Aか、Aでなければ B か、そのどちらか」ということを意味するばあいとがある。では、右の文章での「あるいは」は、そのどちらにあたるものであるか？　いったい、佐藤氏が「眼を向ける」というのは、「独占ブルジョアジーの経済政策か、そうでなければ独占資本主義の生産関係か、そのどちらか」だというのであるか？　それとも、「眼を向ける」当の相手は「同じ事柄、同じ内容」であって、「見方によって、独占ブルジョアジーの経済政策といってもよいし、独占資本主義の生産関係ともいってよいもの」だというのであるか？

ごらんのように、この「あるいは」の意味をどちらに解釈しても、右の文章がまったく意味をなさないものであることは、あきらかである。まず、「どちらか」という意味にとってみよう。そのばあいには、「独占ブルジョアジーの経済政策」に「眼をむける」のと、「独占資本主義の生産関係」に「眼を向ける」のとでは、「眼を向ける」当の対象がまったくちがい、したがって、このように全くちがった二つの対象の「どちらか」ひとつなどという議論は、きわめて不正確、アイマイであって、とうてい真面目に「眼を向ける」に値しないものであることがわかる。では、「同じ事柄のことなった表現」としてみたばあいにはどうか？　このばあいには右の文章のノンセンスぶりはよりいっそう明白なものとなる。というのは、「独占ブルジョアジーの経済政策」と「独占資本主義の生産関係」とを「同じ事柄の別様の表現」などと考えることはとうていできないからである。

このように「あるいは」という言葉の解釈を中心として右の文章の正否を判断するのは、適当でないように思われるかもしれない。もちろん、ここでの問題は、たんに「あるいは」という単語そのものにかかわりがあるだけのものでは、けっしてないのである。さきの文章において中心的な問題となっているのは、なにか？　それは、「労働者の労働条件や生活条件に影響をおよぼしてくるもの」というところにある。「労働条件や生活条件」を「直接に決定するもの」をとりあげることをあえてさけて、もっぱらこれらに「影響をおよぼしてくるもの」をとりあげ、この「影響をおぼしてくるもの」を「独占ブルジョアジーの経済政策」だとしながら、そこに附け足しとして、「あるいは」という言葉でつないで「独占資本主義の生産関係」を持ってきたところに、まさにこの点にこそ、問題があるのである。こういう文章を書くことのできる論者は、かれ自身、「労働条件や生活条件」を「直接に規定するもの」がほかならぬ「独占資本主義の生産関係」そのものであることが全然わかっていないということを自らさらけだしているものである。さらに、「生産関係」すなわち「経済的土台」と「政策」すなわち「上層建築」との基本的関連についても、また、「経済政策」と「政策」とのちがいと関連についても、最小限度必要な科学的知識を持ち合していないことを自らの手によって明示しているものである。わが「構造改革論」者の衆智をあつめた「きわめてわかりすやい説明」がこのようにみずからの完全な誤解、錯乱の「きわめてわかりやすい説明」に転化せざるをえなかったのは、かれらがもっぱら「影響をおよぼすもの」と「経済政策」との二つにばかり「眼を向け」ていて、そもそも肝腎かなめの「直接に決定するもの」、「生産関係」そのものにまともに「眼を向け」ることができなかったためと考えられるのである。だが、この「眼の向け」方については、のちにさらにその真の意味を読みとることができるであろう。

②　「その政策転換させ、その経済構造(生産関係)を部分的に変革してゆくことである。」――ここに簡単に列挙さ

れている二つの言葉―「経済政策の転換」と「経済構造の部分的変革」―は、「構造改革」という名の「論」を構成する中心部分であり、すこしく誇張していうならば「構造改革」という名の「論」の全部なのである。この二つの言葉は、そのままの形で――というのは、そのほかの言葉に云いかえることはできないし、そうすることはまた都合わるいから、――いたるところで、ただただくりかえされるばかりである。――曰く、「経済の面での構造改革の内容は、一言でいえば独占の経済政策を転換させ、独占資本主義の経済構造―生産関係を部分的に変革することである」(一四ページ)。曰く、「政策転換ないし生産関係の部分的変革……」(4)(一五ページ、傍点―山本)、等々。

(4) ここでの「ないし」という言葉の絶妙ぶりをよく玩味されたい。これは、さきほどの「あるいは」にも匹敵するもので、まさに「国語構造改策論」者にうってつけの語法というべきである。

まず、「経済政策の転換」という言葉については、さきに説明したように、それが純然たるノンセンスにすぎないことを指摘しておく必要がある。この言葉をもって「構造改革論」者たちがいいあらわそうとした当の事柄そのものについての吟味は後段においておこなわれ、そこにおいて読者は、右の言葉がたんなるノンセンス以上のものであることを十分思い知ることができるはずである。だからここでは、右の言葉が、「政策」という文字に直接撞着するものであることを認識しておけば十分である。独占ブルジョアジーが労働者階級を中心とする経済闘争の圧力によって、かれらの経済的要求の一部を独占ブルジョアジー自身にとって受け容れられる限りにおいてうけいれ経済的収奪の形と方法を転換し、これによって労働者階級の階級闘争をそらし鈍化させるという一貫した政策を――そのときの諸条件に応じて適当な形で――とりつづけるという独占資本主義下で自明の法則的事実についてその内容を正しくとらえることをせず、右の事実の中からただむやみやたらと「経済的」、「転換」、「政策」という三つの単語ばかりあさりまわ

って、これらを奇妙にくっつけてデッチあげたのが、ほかならぬ「経済政策の転換」という、「国語改造」的タワ言なのである。状況に応じて経済的収奪の方法を変える＝転換することによって階級支配を維持＝強化するというのがまさしく支配階級の政策なのであるが、この自明の法則的事実が、「改革論」者の眼には、「経済政策そのものが転換される」というように、まったく顚倒＝「改革」されたものとしてしか映らないのである。

「経済構造（生産関係）の部分的な変革」という言葉についても、それが言葉そのものとして成り立たない全くノンセンスな綴り合せでしかないことは、さきに説明したところでも明白である。「経済的社会構造」は「構造」として全一体を成しているのであって、「構造」全体の変革以外に「構造」そのものの変革はありえない。「部分的な変革」というのは、「構造」そのものではなくして「構造」の一構成部分そのものだけのとるにたらない――つまり、「構造」全体に影響をおよぼすおそれのない――改良もしくは加工ということ以外にありえないのであって、これを「部分的な変革」というのは、「変革」という言葉の本来の意味を逸脱するものといわなければならない。いわんや、はじめにまず「構造の変革」であると云っておき、つぎに「全体ではなくて部分的な」という限定をそっと挿入するなどというやり方は、それだけでも職業的ペテン師はだしの手口というのほかない。ところが、後段においてこの「経済構造―生産関係の部分的な変革」というものの本当の中味にお目にかかるときに存分思い知らされるはずであるが、これらの論者の「はだし」の手口[5]はなかなかもって右のように簡単なものではなく、格段に複雑、精巧な、真に堂に入ったものとなっているのである。

（5）さきに「独占ブルジョアジーの経済政策、あるいは独占資本主義の生産関係」という箇所で、この「あるいは」という言葉の意味をいささか究明して右の箇所の論理的性格を追究するということをこころみたが、このようなこころみをしたということ

が、すでにわれわれがこの「はだし」の手口にまんまと乗せられていたことになるのである。なぜならば、「独占の経済政策の転換」と「生産関係の部分的変革」という二つの言葉を並べて、これが「構造改革」だという「論」――というより厳密には「言葉の綴り合せ」というべきだが、――を唐突にもちだすにさきだって、あらかじめ、これと見合う「独占ブルジョアジーの経済政策」と「独占資本主義の生産関係」とをなんとか並べて挙げておくことが体裁上ぜひとも必要であって、このばあい、ただこの二つを並べて挙げておきさえすればよいのであるから、二つをつなぐもの――接続詞――が「あるいは」であろうと「ないし」であろうと、はたまた「さらに一歩をすすめて」であろうと、いっさいおかまいなしであったからである。

(三)

では、そのつぎの文章――「**その意味で構造改革は従来、労働運動でいわれていた改良とは異なっており、独占支配の結果――労働条件や生活條件の悪化にたいする防衛的なたたかいから一歩をふみだし、その原因にたいするたたかいにとりくもうとするもので、ふつうの改良闘争――経済闘争ないし要求獲得闘争にくらべてはるかに攻撃的・先制的な性格をもっている**」(前出、一二ページ)――は、どうであろうか?

この箇所は、なかなか「戦闘的」な言葉が乱発されていて、ことに「高度成長」「平和ムード」によって意気銷沈気味の小ブルジョアを鼓舞すること一方ならず、といいたいところである。だが、よくよく見るならば、そこにあるのは、内容の空っぽのただの大言壮語であり、言葉の綾だけのものだということがわかるのである。

これまで丹念に見てきたところであきらかなように、この論者は、はじめからなんらの説明もなしに、つまり独断的にいきなり「構造改革」は「改良闘争」とちがうのだ、「構造改革」は「改良闘争」という防衛的闘争から「さらに一歩をすすめたもの」、「独占ブルジョアジーの経済政策を転換させること、経済構造――生産関係を部分的に変革

すること」だと、ただそのことだけ、言葉を並べたてただけなのである。これらの言葉を並べたてたところで、つまり、「経済政策を転換させる」と「経済構造を部分的に変革してゆく」という文字を見せておいて、さて、これらの言葉は、なんと「攻撃的・先制的性格」のものではないか、と云う次第である。つまり、はじめに、「改良闘争」と十分ちがわない事実をば言葉の上で「改良闘争から一歩すすめたもの」と名づけ、さらに同じ改良闘争であってなんらの「政策転換」でも「構造変革」でもないものを「経済政策を転換させる」[6]とか「経済構造を部分的に変革してゆく」ことだというようにまったく出たら目の・実体そのものと正反対の・表現でいいあらわしておき、さてこれらの表現について「転換させる」「変革してゆく」というのだから「はるかに攻撃的・先制的な性格をもっている」ではないかと「結論」づけるのは、まったくもって「はだし」の手口の模範ともいうべきものであるのである。

したがって、この「はだし」の手口そのものを読者が見やぶり、その空っぽな大言壮語にまどわされることなくその「改革」の実体を具体的に眺めてみるならば、こうした「攻撃的・先制的な」というような景気のよいかけ声がまことにみじめな、小ブルに特有の、ヒステリックなわめきごえにすぎないことはたやすく知られるのである。

ただ、ここでさすがの「はだし」の手口もいささか控え目にならざるをえなかったということを示しているのは、「この原因にたいするたたかいにとりくもうとするもの」という言葉である。労働者の「労働条件や生活条件」は、その「経済的社会構造」そのものによって、独占資本の支配関係を基本とする資本制的生産関係およびその他の生産諸関係の特定の「組み立て」そのものによって、直接に規定され、決定されているのであるから、「労働条件や生活条件」の根本的改革のためには「経済的社会構造」そのものを変革することが絶対に必要であり、またこの「経済的社会構造」という「この原因」を根本的に除去すること以外に「労働条件や生活条件」を根本的に改変することがで

きないのは当然である。だから、「労働条件や生活条件」の根本的改変のための闘争は、まさに「その原因に対するたたかい」そのものでなければならない。ところが、これらの「構造改革論」者たちは、「その原因にたいするたたかい」そのものを提起することをさけて、たんに「その原因にたいするたたかいにとりくもうとする」ことだけを提唱しているのである。

ところで、「はだし」の手口をもっぱらよりどころとして一見堂々たる「論」を成すことをその専門としている論者たちである。右のような「その原因にたいするたたかい」そのものを提起しないでわずかに「その原因にたいするたたかいをとりくもうとする」ことだけを提唱している、この改良主義者特有の怯懦性と妥協性とを読者に見破られないようにするために、「さらに一歩をすすめて」、つぎのような「合理化」的議論を展開するのである。

「しかしながら、他方、構造改革は革命の勝利後におこなわれる資本主義的生産関係の根本的な変革とも異なっている。革命後における根本的変革とはいうまでもなく、国家権力を掌握した労働者階級が資本主義的私有制を一掃して、新しい社会主義的な生産関係によってそれをおきかえることであるが、構造改革は革命後の根本的変革そのものではなく、そのような根本的変革に近づいてゆく過程で、より正確にはそうした変革に途をひらくために独占ブルジョアジーを追いつめてゆくたたかいであり、その意味ではやはり改良であって、革命とは区別されなければならない」

（前出、一二―一三ページ）。

ここでの議論は、まことにめざましい「革命的」言葉の連発で、一見すると、きわめてもっともなことをきわめて「革命的」な表現で述べたてているもののようにみえる。だが、すこしたちいってみるならば、そこにあるのは、ただわけもわからない「革命的」言葉の混乱した羅列だけであるということ、そしてかえって現実的変革過程について

の論者自身のまったく救いようのない、錯乱した妄想を示すだけだということは、容易にわかるのである。

まず、この論者が「構造改革」のほかに「革命」と「生産関係の根本的な変革」という、二つの言葉を使いわけて、自分の議論を「合理化」しようとしているところを注意されたい。「革命の勝利後におこなわれる」という文句によって論者自身が示しているように、ここでの「革命」とは、労働者階級を中核とする「人民が国家権力を奪取すること」、正確には「独占ブルジョアジーの手にある国家権力を打ち倒して、労働者階級を中核とする人民自身の国家権力をうちたてること」である。このように「人民自身の国家権力をうちたてること」が「独占ブルジョアジーをただ追いつめてゆくだけのたたかい」と根本的にちがうことは自明であって、この論者が、右の引用箇所の最後において「その意味ではやはり改良であって、革命とは区別されなければならない」などとことさら「改良」と「革命」との差違を述べたてているのは、まさに「語るに落つる」たぐいといわなければならない。

つぎに「革命後における根本的変革」について、佐藤氏は、これを「資本主義的私有利を一掃して、新しい社会主義的な生産関係によってそれをおきかえること」だと説明しているが、はたして、この説明は誤りないものだろうか？それはまったく誤ったものである。のみならず、こういう説明を下す論者は、かれ自身、社会主義革命とはどういうものか、とくに独占資本主義社会における社会主義革命とはどういうものかということについて、簡単な基本的理解すらまったく持ちあわしていないということをさらけだしているものといわなければならない。

「国家権力を掌握した労働者階級が資本主義的私有制を一掃する」ことなどとうていできた事柄でもなく、またそのような「一掃」をこころみることは、うたがいもなく反革命的暴挙といわなければならない。またさらに「資本主義的私有制を一掃して、新しい社会主義的な生産関係によってそれをおきかえる」ことなどなおさらとうていできるこ

とではなく、また「一掃して、それによっておきかえること」をこころみるのは、うたがいもなく反革命的暴挙といわなければならない。資本主義社会は、すでに述べたように「経済的社会構造」をその「現実的土台」としており、したがって、そこに構成要素としてある生産関係は、たんに支配的な資本制的生産関係のみではない。その社会を構成している生産関係が資本制的生産関係のみであるような資本主義社会、いいかえれば、その社会を構成する階級が資本家と賃銀労働者と土地所有者とだけであって、それらの中間にありとあらゆる色合の過渡的な中間階層および独立生産者の階層が存在していないような純粋な資本主義社会などというものはたんに小ブル的妄想の産物としてあるにすぎない。またそのような資本主義社会を誰かがつくりだすことができたとしても、そのような資本主義社会は一年と存続することはできないであろう。「国家権力を掌握した労働者階級が資本主義的私有制を一掃して、新しい社会主義的な生産関係によってそれをおきかえること」がその言葉どおりできるなどと考えることは、その資本主義社会が右のように資本家と賃銀労働者と土地所有者とだけから成り立っているものと考えることを意味するのであって、まったく根も葉もない空談義でしかない。ロシアではソヴェトが国家権力を掌握した一九一七年十月から四年近くたった一九二一年四月においても、「当時の経済的社会構造」を構成する要素たる生産関係（＝ウクラッド）は「㈠家父長制的な、いちじるしい程度に現物的な農民経済、㈡小商品生産、㈢私経営的資本主義、㈣国家資本主義、㈤社会主義」の五つであり、しかも㈡㈢の要素がきわめて優勢であったということは、レーニンのきわめてすぐれた論文「食糧税について」（一九二一年四月）がつとに明らかにしているところである（レーニン会集、第四版、第三十二巻、三〇九―三一〇ページ参照）。ことに第二次大戦後の現在の段階において、「独占ブルジョアジー」を「敵」などと称しながら（前出、一五ページ）、「国家権力を掌握した労働者階級が資本主義的私有制を一掃して」などと論じてい

るようでは、とうてい、「民主主義革命」などお話になったものではないのである。「新しい社会主義的な生産関係によってそれをおきかえること」などと述べたてているようでは、新民主主義も、人民民主主義も、いや人民統一戦線ということすらまったく理解の外だということはうたがう余地がないのである。

以上によつて明白なことは、この論者が社会主義革命の発展過程の具体的内容について、いいかえれば、「国家権力の掌握」と「経済的社会構造の社会主義的変革」との関連について、なにひとつ理解することなく、ただ「革命とは権力を掌握すること」であって「権力を掌握すれば資本主義的生産関係を一掃して社会主義的な生産関係におきかえることができる」ものだと簡単に思いこんでいる、ということである。

こうした一知半解の生まっかじりの「革命」論者がつくりだしうる唯一の「改革路線」というのが、精々のところ、「こうした変革〔生産関係の根本変革〕に途をひらくために独占ブルジョアジーを追いつめてゆくたたかい」などという、まことに得体の知れないキテレツなものとなるのも、けだし、理の当然というべきであろう。「生産関係の根本的変革に途をひらく」ものは、論者自身無意識のうちに述べたてている「労働者階級による国家権力の掌握」以外の何ものでもありえない。だから、「そのような根本的変革」に確実に「近づいてゆく」唯一の過程は、「政策転換」や「部分の改良」ではなく、まさに「国家権力を掌握する」ためのたたかいであって、ただ「独占ブルジョアジーを追いつめているだけのたたかい」などというのは、まったくノンセンスというのほかないものである。

ところで、右にみたように、「構造改革」が「ふつうの改良闘争にくらべてはるかに攻撃的・先制的な性格をもっている」という前言を補飾するために「独占ブルジョアジーを追いつめてゆくたたかい」という勇ましいあいの手を入れながら、「やはり改良であって、革命とは区別されなければならない」という附け足しをつけてはみたが、これで

はまた「改良」的色彩が強くなる恐れがある。要するに、具体的にその現実的内容を示してこれを正確に規定してゆくのではなくして、ただただ言葉の上だけであれこれ言い廻しているだけであるがために、このように、本来無用な・しかし「はだし」の論者にとっては必要やむをえない・「調整」が当然にいろいろと持ちこまれることになるのである。そこで、つぎには右の「やはり改良であって、革命とは区別しなければならない」という氏自身の言葉が、ただの「改良」と寸分ちがわないものだという「構造改革」の本当の中味をあまり正直にいいあらわすことになるまづさをさけんがために、またぞろここに「味をつけ」て、ただの「改良」とはやはりちがうもので「革命」に近いものだという印象をつくりだす努力がはらわれることになる。つまり、「革命」的な「味をつけ」るために、つぎのパラグラフが適当な文字を連ねて登場するというしだいである。

(四)

まず、当の「味つけ」用パラグラフをつぎにかかげてみよう。

「ただし、その場合、構造改革は資本主義の枠内でも可能なもので、むしろその枠内でやるものだといってしまうと、一面正しく、一面誤ってくる。というのは構造改革とは、たしかに社会主義への移行の根本的な条件である権力の獲得をまってはじめておこなわれるのではなく、そのかぎりでは資本主義の枠内でもおこなわれるものであるが、もともと構造改革とは独占資本主義体制の根本的変革をめざし、独占の支配を掘りくづしつつ、革命を日程に上しうる条件をつくり上げてゆこうとするものであって、いわば資本主義の枠を突破して社会主義をうちたてることを本来の目標としているからである。そうはいっても、もちろん構造改革とは部分的な改革をつみ重ねてなしくずし的に社

会主義にうつってゆこうとするものではなく、労働者階級による国家権力の掌握と資本主義的生産関係の根本的変革なしに社会主義をうちたてることはできないということを自明の前提としている」（前出、一三ページ）。

ごらんのように、このパラグラフは、わが国のいわゆる「構造改革論」者のふりまわす「論」がどんなに通常の論理をふみはずしたひどいものであるか、むしろ論理的ペテンと詭弁との雑炊でしかないかということを、このうえもなく「わかりやすく説明して」いるものである。このことをはじめから丹念に見ていってみよう

① **「構造改革は資本主義の枠内でも可能なもので、むしろその枠内でやるものだといってしまうと、一面正しく、一面誤ってくる。」**――「一面正しく、一面誤って」などという文句は、弁証法まがいの体裁で、「弁証法」をかじりたての初学者などちょっとうれしくなるような代物（シロモノ）である。だが、こうした文句も、当の論者自身の論理能力のまことに貧相なことをさらけだすだけのものである。「一面……、一面……」というのは、当の事物が二つの相反する側面をもち、したがって矛盾の統一物であるときにかぎって、この事物を正しく把握するものであり、その場合の唯一の正しい概念的把握の方法である、だが、「正しい」側面と「誤った」側面との二面の統一などというものが、いったい、ありうるであろうか？　こういう文句がまったくの詭弁でしかないことはうたがう余地はない。しかも、きわめてずるい、狡猾な詭弁である。というのは、この論者自身、その前のパラグラフで――さきに見たように――「構造改革は革命の勝利後におこなわれる資本主義的生産関係の根本的な変革とも異なっている」とはっきり述べており、それは「そのような根本的変革に近づいてゆく過程で、……革命とは区別されなければならない」などとごていねいにも述べたてて、「資本主義の枠内での部分的変革」だと確言しているからである。だが、ここでとくと注意を要するのは、「構造改革は資本主義の枠内でも可能なもの」という文句である。この傍点をつけた箇所に、とくにこの論者の「は

だし」の狡智がひらめいているのである。「構造改革」という言葉そのものは、はじめに説明したように、「構造そのものの変革」を当然に示しているのであって、「構造を構成する部分だけについての、部分的変革」などということを示しえないものである。したがって、正常な国語的および論理的能力の持主である善意の読者は、「構造改革」という言葉にぶつかれば、当然にもすぐ「構造そのものの変革」すなわち「生産諸関係の組み立て全体の変革」を意味するものと考えがちである。このような、正常な論理能力の持主の当然の解釈を、わが論者は——おそらく意識的に——悪用するのである。かれは、はじめに、「構造改革」とは「生産諸関係の組み立て全体の変革」ではなくてその「部分的変革」なのだという、正常な国語的ならびに論理的能力を逸脱した、つまり完全に正しい意味に反した不当な内容を与えておいて、さて時に応じて、この「構造改革」という言葉を、読者の正当な解釈のままにまかせて「生産諸関係の組み立て全体の変革」のような意味に用いるという、まことにずるがしこい手口をつかうことをしているのであって、この場合の「可能なもの」というときの「構造改革」とは、まさに右のような正常な国語的ならびに論理的能力の持主である善意の読者の正当な読み方を心得ていて、この読み方を逆用しているのである。つまり、この文章全体は、善意の読者がこれらの論者の「部分的変革」という言葉にまどわされて「構造的改革」とはいったい「生産諸関係の組み立て全体の変革」なのか、それとも「部分の改良」なのかはっきりしなくなり、そのどちらでもあるようだと漠然と混同しそうになっているすきに乗じて、「部分の改良」という意味にとれば——これが「一面」である——「資本主義の枠内でも可能なもの」というのは「正しい」が、「生産諸関係の組み立て全体の変革」という意味にとれば——これが他の「一面」である——「資本主義の枠内でも可能なもの」というのは「誤ってくる」と「説得」しているものなのである。自分ではじめに「構造改革」とは、「構造そのものではなく、その部分の改

革」だと云っておきながら――というよりは、と云って混乱を意識的にもちこんでおいて――善意の読者の正当な読み方を逆用するとは、なんとあきれはてた「はだし」の手口ではあるまいか！

② **「というのは構造改革とは、たしかに社会主義への移行の根本的な条件である権力の獲得をまってはじめておこなわれるものではなく、そのかぎりでは資本主義の枠内でもおこなわれるものであるが、もともと構造改革とは独占資本主義体制の根本的変革をめざし、独占の支配を掘りくずしつつ、革命を日程に上しうる条件をつくり上げてゆくものであって、いわば資本主義の枠を突破して社会主義をうちたてることを目標としているからである。」**――まず、「資本主義の枠内でもおこなわれるもの」という文句が、①のばあいと同じ狡智を示しているものであることに注意されたい。「たしかに……権力の獲得をまっておこなわれるものではなく」と、わざわざ自分で「たしかに……でない」と保証しているのである。「権力の獲得」以前というのであれば、正真正銘の「資本主義の枠内」であって、それ以外の何物でもない。つぎに、まことにずるいのは、「資本主義の枠内でもおこなわれるのであるが」として、「だが、枠を出るものでもある」という意味をふくんだ文章がつぎに当然につづくという感じをば善意の読者に――意識的に――与えようとしている点である。そしてそのような当然の感じを予想して、しかも、それと明記することなく、「根本的変革」――「資本主義の枠の突破」という「目標」をかかげるだけで巧みにぼやかして、しかも明記したと同様の効果を狙っているのである。だが、このような狡智を見やぶることは、それほどむつかしいことではない。「目標としている」と当の論者がいくら確言しても、それは、主観的判断を出ないもので、客観的妥当性はもちえない。はたして、客観的に「目標としている」ものであるかどうか、つまり、「その目標たるものが当然にその中にふくまれて必要な構成部分になっている」かどうかは、「構造改革」なるものの内容を具体的に検討してみたところで、

はじめてはっきりわかることである。われわれは、つぎの節において、いわゆる「構造改革」なるものの内容をとくと吟味するはずであるが、しかし、その吟味をまたずとも、すでにこれまでの各種の「はだし」の手口からおして、その実体、つまり具体的内容なるものがただの「改良」にほかならず、―しかもただの「改良」より悪いことは、たんなる「改良」をば本来の構造改革だと云いくるめることによって、本来の改良の重要な意義を正当に評価することを妨害するという客観的役割をはたしているのである――「社会主義をうちたてることを本来の目標」としているどころか、「この本来の目標」を見失わせ、本来の目標を達成するための唯一確実な途を積極的にふさぐものにちがいないということを、正当にも直観することができるのである。

ところで、「はだし」の手口は、まだほかにもある。それは、「独占資本主義体制の根本的変革をめざし、独占の支配を掘りくずしつつ、革命を日程に上しうる条件をつくり上げてゆこうとするもの」というくだりである。まず、「独占資本主義体制の根本的変革」という言葉であるが、「独占資本主義体制」というのは「独占資本主義社会という経済的社会構造」のことであるのか、それとも、「独占資本の支配体制」のことであるのか？　もし前者ならば、その「根本的変革」とは「資本主義的生産関係の根本的変革」にほかならず、そのための「条件」が「労働者階級による国家権力の掌握」であることは氏自身明記しているように「自明の前提」であって、「部分的改革」などではありえない。また、もし後者ならば、それは、直接に「労働者階級による国家権力の掌握」そのものと同じ内容のものとならざるをえない。いづれにせよ、「独占資本主義体制の根本的変革」を「めざす」ならば、直接に第一に、「権力の掌握」のためのたたかいを主要な内容とするものでなければならない。ところが、情けないことに、この論者は、本人自身の「自明の前提」を忘れて、「権力の掌握」を見失い、「構造の部分の改良」などを持ちだしてくるのである。

つぎに「独占の支配を掘りくずしつつ」という言葉である。「掘りくずしつつ」という日本語は、一方で「掘りくずす」という動作をしながら他方で……するというときにのみ用いられる。ところで「独占の支配を掘りくずす」とは、どういうことであろうか？　それは「独占の支配を支えているもの」を「なくす」あるいは「奪いとる」、「つきくずす」ことである。「独占の支配を支えているもの」はなにか？　それは、独占資本主義の生産諸関係の組み立て全体であり、さらにこれを維持＝強化する強力装置たる国家権力である。だから「独占の支配を支えているもの」を「なくし、奪いとり、つきくづす」ことは――佐藤氏自身の「自明の前提」によれば、――なによりも第一に「労働者階級による国家権力の掌握」ということでなければならない。ところが、わが「構造改革論」者によれば、「構造改革」とは「革命後における根本的変革」とはまったく異なったものであり、「構造の部分の改良」である。それゆえ、「構造改革」とは「独占の支配を掘りくずしつつ……する」などという文章をかかげるのは、「支配を掘りくずす」という言葉の意味を真の改革論者らしく正当にとらえることなどまったくしないで、ただその言葉の良い調子に酔っぱらっているだけだということを示すものといわなければならない。[6] しかも、この論者は、「独占の支配を掘りくずす」という動作を一方でしながら、他方で「革命を日程に上しうる条件をつくり上げてゆこうとする」などと述べたてている。「独占の支配を掘りくずす」ものは、「労働者階級による国家権力の掌握」、すなわち佐藤氏のいうところの「革命」である。つまり、一方において「国家権力の掌握によって独占の支配を掘りくずす」というはたらきをしながら、同時に他方では「国家権力の掌握を日程に上しうる条件をつくり上げてゆこうとする」はたらきをするというわけである。なんと美事な時間錯誤的文章であるまいか！　要するに、「支配を掘りくずす」とか「革命を日程に上しうる条件」とかいうような、一見響きのよい、景気の良い言葉の本当の意味がわけわからず、ただその景気の良さに

酔っぱらって、出まかせに並べたててみたまでのことであって、出来上ってみると、とんだ時間観念の欠如をさらけ出すだけのものとはなったものである。

（6）さきのパラグラフの中にある「独占ブルジョアジーを追いつめてゆくたたかい」などという、景気のよい言葉もまったく同じたぐいである。「追いつめてゆく」という言葉は、「追いつめる」側が絶対に優勢であり、しかも「追いつめる」ために必要にしてかつ十分な力を、なによりもまず強力を――国家権力を――もっているときでなければ、用いるべきではない。「独占ブルジョアジーを追いつめる」などというのは、「労働者階級による国家権力の掌握をまって、その後に」はじめて「日程に上しうる」ものであり、また「日程に上さねばならぬ」ものである。「国家権力の掌握」以前にあるのは、まだ、どちらがどちらを「追いつめる」かを決定するためのたたかいである。「追いつめる」ための決定的な「条件」がそなわらないずっと以前の段階において、しかもそのための決定的な「条件」とはなにかということを明らかにして、その「条件」達成のためのたたかいを説明することをすこしもしないで、ただやたら「独占ブルジアジーを追いつめてゆくたたかい」だとか「独占の支配を握りくづしつつ」などという景気のよい言葉を並べたてることばかりしているのは、まったく悪質のデマゴーグというのほかない代物である。

同じことは「資本主義の枠を突破して」という言葉についてもいえる。「資本主義の枠の突破する」とは、「資本主義」という「構造」を「変革」すること以外にありえない。「一部改良」では「突破」どころでなくて、まごまごすると逆に「丸めこまれ」である。だから、「資本主義の枠を突破する」は、例の「自明の前提」である「労働者階級による国家権力の掌握と資本主義的生産関係の根本的変革」ということにほかならない。

そこで、さきにゴシック体で示した②の後半の部分について、その中の景気の良い、内容空疎な言葉のかわりにその本当の意味を示す言葉をおいてみれば、その全文はつぎのようになるのである、――曰く「もともと構造改革とは、労働者階級による国家権力の掌握を目ざし、労働者階級による国家権力の掌握をはたしつつ、労働者階級による国家権力の掌握を日程に上しうる条件をつくり上げてゆこうとするものであって、いわば労働者階級による国家権力の掌

招によって社会主義をうちたてることを本来の目標としているのである」と。つまり、氏自身の「自明の前提」をただひねってわけわからないように―時間錯誤的に―云いかえて、これに「構造改革」という文字をくっつけただけだということである。なんと「自明の前提」の効果の偉大なことよ！

㈤

さて、以上の説明にもとづいて、佐藤氏は、「構造改革」の意味をつぎに要約する。

「要するに、構造改革とは高度に発展した資本主義国における社会主義への接近の形態であり、社会主義革命の準備であり、その過程での過渡的なたたかいであり、社会主義をめざす政治（戦略）路線である。そして経済の面での構造改革の内容は、一言でいえば独占の経済政策を転換させ、独占資本主義の経済構造―生産関係を部分的に変革することである」（前出、一三―一四ページ）。

「高度に発展した資本主義国」とは、「独占資本主義体制の国」ということである。「構造改革とは独占資本主義体制の根本的変革をめざす」ものだとは、たったいまくりかえし聞かされたところであるが、「労働者階級による国家権力の掌握と資本主義的生産関係の根本的変革なしに社会主義をうちたてることはできない」という、氏の「自明の前提」にしたがえば、「構造改革」が「社会主義へ接近」するためには、その前にまず「資本主義的生産関係の根本的変革へ接近する」ものでなければならず、またそのためにはそれにさきだってなによりもまず「労働者階級による国家権力の掌握へ接近する」ものでなければならないのは、これまた「自明」である。だから、これらの必要不可欠な「中間

項」を省略して、あたかも「構造改革」が直接に「社会主義そのものに接近する形態」であるかのように云いふらすのは、さきの「自明の前提」の趣旨に反して、まったく「接近」ということの意味をふみやぶるものといわなければならない。「社会主義革命の準備」というのも、さきの「自明の前提」にしたがえば、「労働者階級による国家権力の掌握のための準備」ということでなければならないのは、これまた「自明」であり、したがって、「国家権力の掌握のための準備」とは、「労働者階級」自身がその掌握のために必要ないっさいの条件を主体的に整備することであり、なによりもまず、掌握のために必要不可欠な意識と組織とそして強力を整備することでなければならぬ。ところが、のちに見られるように、こういう必要不可欠の準備は、「構造改革」の中にはひとつも見出されないのであって、「社会主義革命の準備」などいう言葉は、ただ響きのよいかけ声だけだということがわかるのである。「**社会主義をめざす政治（戦略）路線**」などという言葉も、一見革命的な調子をもっているようであるが、本人自身その言葉の真の意味をすこしも知らないでただやたら調子の高い金切り声を出しているだけのものである。「社会主義を目指す政治（戦略）路線」というばあいの「社会主義」とは、いったい、「資本主義的私有制を一掃して、新しい社会主義的な生産関係によってこれをおきかえる」ことであるのか、それとも、「労働者階級による国家権力の掌握」のことであるのか？さきの「自明の前提」にしたがえば、前者でなくして後者であることは、あきらかである。というのは、かりに前者であるとしても、「これを目指す政治路線」といえば当然に「労働者階級による国家権力の掌握」がその主たる位置を占めねばならず、とくに「政治」というところに「戦略」という言葉をことさら附け足しているところからしても、このことは明白である。そもそも、「政治（戦略）路線」という言葉そのものは、はじめから「国家権力の掌握」のための戦略路線であって、「社会主義を目指す」とか「社会主義をうちたてることを本来の目標とする」などとい

ったような漠然たる「接近」のための路線などを意味するものではありえない。それは直接に「国家権力の掌握」のために階級勢力をいかに配置すべきか、階級勢力の配置を情勢の進展に応じていかに正しくおこなうべきかということの問題である。ところで、これらの連中のいわゆる「構造改革」なるものの中に、いったい、右のような「政治（戦略）路線」という言葉の意味にすこしでも該当するようなものがあるであろうか？　あるのは、「経済の面」での「部分の改良」だけであり、あとは、「この闘争の主体は労働者階級をはじめ、独占支配によって苦しめられている中間諸階層をふくむ広汎な勤労大衆である」（前出、一五ページ）とか、「構造改革のたたかいは、労働者階級の指導する広汎な反独占統一戦線に結集した勤労大衆が独占ブルジョアジーとたたかい、かれらを政治的に孤立させ、経済的によわめ、階級的な力関係をかえ、独占支配を終局的に打倒するための条件をつくり上げてゆくたたかいである」（前出、一五ページ）とかいったような、例によって例のごとき、内容からっぽの、響きのよい大ぼらだけである。いったい、「闘争の主体」は「労働者階級をはじめ独占支配によって苦しめられている中間諸階層をふくむ広汎な勤労大衆」であるなどという規定を下すような手合が、「政治（戦略）路線」を云々する資格があるだろうか？　これでは、「労働者階級」も「中間諸階層」も同じ「主体」となり、同じ「勤労大衆」になってしまっている。いったい、独占資本家以外の中小資本家、小資本家兼賃銀労働者、独立生産者兼資本家、独立生産者兼賃銀労働者等々の、文字どおり独占資本家と賃銀労働者との中間にある諸階層は、「主体」なのか、「勤労大衆」なのか？　いったい、「広汎な反独占統一戦線に結集した勤労大衆」の中に、中小資本家、町工場の主人、富農は入るのか入らないのか？　これらの「中間」の諸階層は相当数を占めるものであるが、かれらは、文字どおり「中間」にあって、「政治的に孤立」したままであり、「経済的によわめ」られているものなのか、それとも、その反対であるのか？

この論者は、「労働者階級をはじめ中間諸階層をふくむ広汎な勤労大衆」が「独占支配」によって「独占の専断」によって（前出、一六ページ）「苦しめられている」もので、かれら「広汎な勤労大衆」の「敵」は「一部少数の独占ブルジョアジー」であるとくりかえし述べたてているのであるが、いったい、それならば、「独占ブルジョアジー」は、はじめから「政治的に孤立」していて、いまさらあらためて「かれらを政治的に孤立させる」必要はすこしもなく、また「階級的な力関係」もそもそものはじめから「広汎な勤労大衆」が「優位」にあることはあきらかであって、これまたいまさら「階級的な力関係をかえる」必要などつゆほどもないではないかという、当然の正当な論駁を考えつくことができないありさまである。このことは、裏返していうならば、「独占ブルジョアジー」が「一部少数」でありながら、そして「独占支配によって苦しめられている」はずの「勤労大衆」が「広汎」であるにもかかわらず、現在は――つまり、「構造改革」のおかげで「独占ブルジョアジー」が「孤立」し「弱められ」「追いつめられ」「掘りくずされ」るようになる以前には――なぜ、「政治的に孤立」していないのか、なぜ「経済的に圧倒的に強い」のか、とくになぜ「階級的な力関係において優位に立っている」のかという、当然の疑問をばかれら「構造改革論」者たちはとらえることも提起することもできないのだということを端的に示すものといわなければならない。そもそも、現実の事態そのもの、その原因および根拠を正しく把握することをしないで、ただ景気のよいかけ声ばかりで、どうして「政治（戦略）路線」など、云々できようか？　「かれらを政治的に孤立させ」などと威勢のいい言葉を並べながら、さて、「なぜ、かれらが現在政治的に孤立していないのか、なぜ、階級的な力関係において優位にあるのか」ということをすこしでもまじめに考えてみようとしないとは、なんと安直な煽動政治屋であることか！

要するに、これらの「構造改革論」者たちは、「政治（戦略）路線」を正しくうちたてるためには、まず第一に独

占資本主義国の経済的社会構造を分析し、そこにいかなる経済法則がいかに貫徹しているかを明らかにし、ついで、その上に階級関係を正しく分析することが基本的な「自明の前提」であるということがすこしもわからないのである。そうした当然の「経済的社会構造の分析」とこれにもとづく「階級関係の分析」をすっかり省略して、ただ「独占の支配、専断、横暴」と「二重構造」という、俗物的な既成概念におんぶして、これによって、いとも手軽に「二重構造の解消」といういわば「経済路線」と「独占を追いつめ、孤立させる統一戦線」という「政治（戦略）路線」とを即席に唱えているだけなのである。それゆえ、こうした「インスタント政治（戦略）屋」たちが、「今日では、労働者階級は、防衛的な単なる改良の闘争を一歩ふみこえて独占支配の根本を突いてゆく闘争を組織し、その支配を制限し、弱めながら、体制の根本的な変革に道をひらいてゆくことができるようになった」（前出、一四ページ）とか、「先制的な闘争をくみ、能動的に革命への道をきりひらいてゆくことができ」る（前出、一四―一五ページ）とかいって、真面目な勤労大衆を踊らせようとしても、けっして簡単に動かすことなどできるものではないのである。そしてかれらがこうした景気のよい・だが小ブルにありがちの・ヒステリックなかけ声を連発すればするほど、むしろ、かれらの「政治（戦略）路線」なるものがきわめてあやしい、インチキなものであることを当然にも感じとってくるのである。その当然の疑惑というのは、つぎの二点である。

第一に、なぜ「一部少数の独占ブルジョアジー」が「敵」となり「広汎な勤労大衆」が「広汎な反独占統一戦線に結集する」のかといえば、それは、「独占」が「専断」であり「横暴」であって「独占支配による苦しみ」が「たえがたい」からであると、かれらは云う。ところで「独占の専断、横暴」とか「独占支配による苦しみ」とは、どんなものか？　それは、かれらの口癖の「政治経済構造」という新造語の例にならって、「政治の面」と「経済の面」と

の二つについていわれるものでなければならぬ。つまり、第一には「政治の面」で「独占の専断、横暴、独占支配の苦しみ」は今日「たえがたい」ものになっている、と云う。ところで、今日の「現代資本主義」の重大な特徴のひとつとして「民主主義の躍進」がもっぱらかれらによってかつぎまわられていることは、周知のところである。「民主主義の躍進」とは、「政治的横暴、独占支配の苦しみ」が以前にくらべて今日でははるかに軽いものになったということである。とすれば、今日ではむしろ、「政治的な専断、独占支配の苦しみ」はほとんどなくなりつつあり、したがって、「独占ブルジョアジー」が「敵」となったり「広汎な勤労大衆」が「反独占統一戦線に結集する」必要は、以前にもましてはるかに薄らいだものと見なければならない。「経済の面」でも、今日では「生産関係の社会化」(?)というまことに珍らしい事態が進行し、しかも「民主主義の躍進」とあいまって「構造改革」が着々とすすみ、おかげで「貧乏の追放」「完全雇用」「最賃制」に加えて「独占の制限、利潤の制限」というおまけまでつくことになりつつあるのであって、これでは「独占の専断、横暴、独占支配の苦しみ」どころか、「独占」は「追いつめられ、掘りくずされて、生きのびる」のが精一杯という有様となる。それゆえ、「民主主義の躍進」によって「政治経済構造」が「構造改革論」者の指示どおり「改革」されればされるほど、「独占ブルジョアジー」は「敵」でなくなり、「広汎な勤労大衆」の「広汎な反独占統一戦線」はますます意味のないものになるのは、不可避である。まさに「構造改革」のおかげで、「独占支配の苦しみ」がなくなり、またまさに「独占支配の苦しみ」がなくなったおかげで「広汎な反独占統一戦線」もますます先き細りとなり、かくして「構造改革」がすすめばすすむほど「構造改革」そのものは不必要なもの、根拠のないものになり、およそ無意味なものとならざるをえない。(7) しかもなお、「民主主義の躍進」をもちだしてこれで「構造改革」が進行すると誤くのは、一度つかった切り札をまたぞろ別につかうようなもので、まったく

のイカサマではあるまいか？　というわけである。

（7）つまり、「構造改革」がすすめばそれだけ「国家権力の掌握」も「革命後の根本的変革」もそれだけ「遠ざかる」ことになる。「社会主義への接近の形態」と称しながら「社会主義そのものに絶対に到達しない形態」すなわち、「真の革命への途を閉ざすもの」であるところに、その本質があるのである。

第二は、かれらのいう「構造改革」は「独占ブルジョアジーを追いつめてゆくたたかい」で、「独占の支配を掘りくずし」たり、「独占ブルジョアジーを政治的に孤立させ、経済的によわめ階級的な力関係をかえ」るほどの「威力」をもち、しかも「一部少数の独占ブルジョアジー」を「敵」として「広汎な勤労大衆」が「広汎な反独占統一戦線に結集」して「先制的な攻撃をくみ、能動的に革命への道をきりひらいてゆくことができる」ものであると再三くりかえして宣伝されているのに、なぜ、「労働者階級の指導する広汎な反独占統一戦線に結集した広汎な勤労大衆」が直接に「国家権力を掌握」し「独占的な資本制的私的所有を社会的所有にうつし」て「敵」を根本的に完全に打倒することをやらないのか、「独占支配の苦しみ」を根本からたちきり直接に社会主義への途をきりひらくことをしないのか？　直接そうすることをしないで、ただ、「独占ブルジョアジーを追いつめていく」ことばかりし、「独占の支配をすこしづつ堀りくずす」ことばかりし、「政治的に孤立させる」ことばかりし、「経済的によわめる」ことばかりし、「階級的な力関係をかえる」ことばかりしていて、「独占ブルジョアジー」を「政治的に打倒し、経済的に収奪し、階級として廃絶する」ことを――それができるほど強力でありながら――すこしもやろうとしないのは、いったい、どうしたことか？　という当然の疑惑である。

この二つの疑惑は、まことに当然のことであって、この点に、はやくも、いわゆる「構造改革論」のもっているか

くれた真実の理論的ならびに実践的意義がうかがわれるのである。そして、これらの真実の客観的意義は、次節において、「構造改革の具体的内容」を具体的に検討することによって、しだいに明瞭になってくるはずである。ここではとりあえず、右のように、「貧困の解消」「完全雇用」「最賃制」によって「広汎な勤労大衆」の「苦しみ」が――「民主主義の躍進」のおかげで――「解消」すると共に、他方において「独占」もその「専断、横暴」を「匡正」されることによって「収奪」を免れて「利潤の制限」を受けるだけで「独占資本」そのものの維持＝再生産に必要な最少限度の利潤を――「民主主義国家」のおかげで――保証されるという、まことに「広汎な勤労大衆にもよし独占資本にもよし」というように「構造改革」された結構な社会は、ただプチ・ブル的妄想の産物としてのみありうるということ、しかも全般的危機における必然的なこのプチ・ブル的妄想の産物を利用して――まさに「構造改革論」の筋書どおりに――「民主的国家権力」をにぎってこの「改革された政治経済構造」を実地に示したものが、ほかならぬファシズムであったという歴史的事実を、あらかじめ指摘しておくにとどめよう。

（未完）

（一九六二・一一・八）